

# 動注化学療法

琉球大学病院は「がん患者の緩和治療」の研究を積極的に進めている。一般にがんの治療は手術・化学療法・放射線治療の3本柱で行われるが、欧米では実にごん患者の70%が体に優しい治療法として放射線治療を選択している。放射線治療が体に優しい理由としては副作用があまり強くない、外来でも治療が受けられる点、体にメスを入れないので、臓器を切り取らずに済むという点が挙げられる。しかしながら、日本ではがん患者の30%しか放射線治療の恩恵を受けておらず、残念なことに沖縄県においては全国最下位の結果となっている。

時として、がんは再発・転移を来し患者を苦しめる。骨転移はその最たるものであり、薬物療法のみでは痛みは楽にならない。骨転移の痛みは放射線治療により患者の60-90%で痛みが軽減することが分かっている。この様に放射線治療でがんの痛みが楽になるのも放射線治療が体に優しい理由となっている。

しかし、全ての再発・転移癌に対して放射線治療が有効というわけではなく、様々な治療を行ってきたが、がんの痛みが楽にならないという患者も少なからず存在する。そのような難治性の再発・転移癌の痛みに対して、琉大病院放射線科では2013年より放射線治療に画像下治療（超音波・CT・血管造影検査などを用いて行う治療）を組み合わせた方法で更なる疼痛緩和を目指す研究を開始した。画像下治療も低侵襲で体に優しい治療法であり、その一つにカテーテル（細い管）を足の付け根より血管内に挿入して抗がん剤を腫瘍の栄養血管に注入する動注化学療法という治療法がある。点滴で抗がん剤を投与する全身化学療法に比べ、高濃度の抗がん剤を腫瘍に投与することができ、これまで肝臓がんなどの優れた治療実績がある（イラストは肝臓がんに対する例で、同様な方法で他のがんにも応用できる）。この動注化学療法と放射線治療を同時併用することで難治性がんの症状緩和の達成が期待される。放射線治療においては後進県の沖縄から動注化学放射線治療による緩和治療を発信していきたい。

（放射線部医師 平安名常一）

問い合わせは診療情報提供書を本院医療福祉支援センター（シエント）電話098（895）1371、FAX098（895）1498まで。

